

## 内側から見た JNTO のイストワール⑩

石井昭夫（元 JNTO 理事、  
元立教大学観光学部教授）

### ジュネーブでの仕事と生活

1981 年内に赴任の予定が千葉県国際観光調査の報告書作成に手間取って 2 か月予定を遅らせ、前任者に迷惑をかけたことを気にしながら、1982 年 2 月はじめ、私は二度目の海外勤務地ジュネーブに赴任しました（→1987 年 2 月）。

振り返ってみて、ジュネーブ滞在の満 5 年間は、公私にわたり、わが人生にとって最も実りある、最も充実した 5 年間であったように思えます。

**ジュネーブ事務所の特性** 当時の JNTO の海外事務所配置は 15 カ所 1 分室でしたが、ジュネーブはマーケットの重要性でも地域分担の拠点でもなく選択された唯一の事務所だったと思います。ジュネーブには国連の諸機関や各分野の国際機関が集中していて、事務所設立時は IUOTO の事務局もあり、運輸省の出先の意味もあって選択されたのでしょう。運輸省から出向の初代所長住田俊一氏は、著書「ヨーロッパの観光と生活」の冒頭で、ジュネーブ事務所長時代に運輸省の政府代表としてソ連、イタリア、スペイン、中近東諸国での国際観光会議に出席したと記されています。

ジュネーブ事務所は 1965 年 3 月の開所ですが、同年 10 月開催の IUOTO メキシコ総会で 1967 年の第 20 回総会を東京で開催することを決議し、同時に 1967 年を国連主催の「国際観光年」とすることも決めました。ジュネーブ事務所が開所早々から IUOTO のロナティ事務局長と度々連絡をとっている様子が「国際観光振興会のあゆみ」からも窺われます。

IUOTO は、国際観光の発展から発生する諸問題に対処するため、1970 年のメキ

シコ総会で観光行政機関の国際連盟から政府間機関 World Tourism Organization (WTO) に格上げ改組する憲章を採択し、1975 年に規定の 51 か国の批准を得て発足しました。この時に本部はスペインの好条件招致でマドリードに移転しましたから、私が赴任したころ WTO はジュネーブにはありませんでした。

ジュネーブ事務所の活動環境は多くの点でパリ事務所とは異なっていました。ジュネーブ事務所の担当地域はスイスとイタリアと東南欧一帯でしたが、市場としてはイタリアが最大で、スイス（1985 年で約 1.5 万人）の 1.5 倍程度の訪日客を送り出していました。スイスは九州より少し大きい程度の面積に外国人（約 15%）を含む 630 万人が住む小国で、スイス国籍者の 73% がドイツ語を、20% がフランス語を、5% がイタリア語を母語とする特異な国情でした。そのうえ、ジュネーブ市（人口 16 万人）はスイス西南端のフランス領に突き刺さったような位置にあり、地理的に偏っており、言語問題とともに良い条件とは言えませんでした。

### ジュネーブ事務所での事業活動

ジュネーブ事務所のことにはパリ在勤時代に何度か訪れているので、状況はわかっていました。やることはあまり変わらないので、とにかく「できることは何でもやる、頼まれたことは断らない」方針で臨みました。本稿を書くために当時の日誌や「国際観光振興会のあゆみ」の在勤各年度の報告をみると、派遣員 2 名、現地雇員 2 名でよくこれだけ多種多様な事業をやったものと驚きます。

1980 年代は日本経済の成長と繁栄の時代で、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」（エズラ・ボーゲル、1979 年）といわれてアメリカを脅かすほどの勢いがありました。日本は西欧でも経済大国として認

知され、スイスでは時計産業を追い詰める日本への関心と警戒心が漂っていました。円高による物価高も進行中でしたから、少しでも多くの訪日客を送り込んで外貨を稼ぐという方向ではなく、日本への関心を高めて将来の訪日観光に結び付くようなソフトな活動を目指し、できるだけ露出を多くする方針で臨みました。消費者向けの広告・広報、メディア対策、一般向けの催物・展示の主催と協力、訪日旅行促進のための旅行者へのアプローチ、スイスとイタリアでの定例旅行見本市等への参加など、事務所の総力を挙げ、展示催し物等では所長・所員の家族も動員して活動を行いました。

作業を複雑にしたのはやはり独仏伊の3言語（場合によって英語も）を使い分ける必要があったことでした。どうしても伝えたい情報はニュースリリースにし、旅行者向けブレティンにし、仏独伊語で発行するし、催物などでの情報提供も場所に応じて独・仏・伊・英のパンフレット等を使用します。英仏独の宣伝印刷物は本部から供給されますが、伊語版はジュネーブ事務所がトリノで作成していました。

**市場の状況** このように一見面倒で、やりにくそうだなと思って始めた宣伝活動でしたが、やってみると正反対で、マイナスはプラスに通ず、実際は素晴らしい立地であり、環境であることに気がつきました。スイスの主要観光市場はドイツ語圏ですが、フランス語圏も小さいながら独立した市場となっていました。スイスでは義務教育までは別言語を学ぶことが義務づけられていましたが、知識階層のみならずともかく、一般大衆向けツアーに2言語以上の旅行者を混載することは不可能ではないにしても、ほぼ無理とされていました。メンタリティの相違もあり、

説明文書の配布や案内なども言語別にやらなくてはなりません。

スイスには旅行業法がなく、当時の旅行業界の実情は、旅行者の店舗が1,100以上もあり、そのうち複数店舗を持つ旅行者は50社程度で、あとは個人商店的な旅行者でした。3つの言語圏で集客するホールセラー旅行者は、最大手のクオニのほか、ホテル・プラン、エアツアー・スイス、ダンザス、TCS（ツーリング・クラブ・ド・スイス）くらいでした。ドイツ語圏は民族派が強く、外国系のホールセール商品はほぼありませんでしたが、仏語圏では、地中海クラブ、JET TOUR、ワゴン・リ、HAVASなどのフランス系ホールセラーがスイス市場向けにアレンジした商品を販売していましたし、スペインのMelia社、イタリアのFranco Rosso社などのホールセール商品もスイスで売られていました。大手のアメリカン・エクスプレスとトマス・クック社はトラベルエージェントとして展開していました。

このような状況なので、スイスで各国が観光宣伝を行う場合、仏独両言語圏向けに異なる対応をせざるを得ません。そのうえわがジュネーブ事務所はイタリアでの活動も求められていました。東アジア諸国でスイスやイタリアに宣伝事務所を置く国はなかったので（ジュネーブにインドの事務所があった）、EATAの中欧支部が毎年スイスのドイツ語圏、フランス語圏とイタリアのどこかでセミナーやトレードショーに共同参加していましたし、チューリヒでは毎年アジア・セミナーと銘打って業界向けセミナーを開催していました。仏語圏ではローザンヌで一般向けの観光博、モントルーで一般&業界向けの旅行見本市が開催され、イタリアでも大規模のミラノの観光見本市（BIT）が毎年開催され、JNTOは必ずこれらに参

加していました。ほかにも時代を反映してホテルや学校、デパート、その他の各種団体による日本のタベや日本週間などの開催希望が多く、展示物や映画を持参して日本観光を紹介する機会にこと欠きませんでした。言い換えれば観光露出の機会は、多分他事務所より2倍も3倍も多かったのです。

さらに付け加えれば、ジュネーブという国際都市には国連諸機関をはじめとする多様な国際機関の多国籍のスタッフが多数居住しています（市の人口の40%が外国国籍といわれる）。彼らエリートは旅行性向が高く、観光宣伝の場としても小さいながら質の高いマーケットでした。観光宣伝の範疇でなくても、ジュネーブは各国がそれぞれお国柄をアピールする場でもあり、日本はすでに近代性をアピールする必要がなく、むしろ美しい自然や独特の伝統文化を知ってもらおう方向に動いていましたから、国連日本政府代表部、総領事館、ジェトロ、日本・スイス協会（日瑞協会）、在スイス日本企業などが様々に日本をアピールする行事を主催ないし共催する機会が多く、そうした場合、観光映画や観光パンフレット、多種多様な写真、ポスター、展示物品等を所有するJNTOは引っ張りだこでもありました。日本が経済大国として本格的な注目を浴び始めていた1980年代にジュネーブに赴任したツキを感じずにいられませんでした。ドイツ語圏での活動では、EATA 中欧支部をはじめとするアジア諸国との共同宣伝にはフランクフルト事務所が協力してくれました。とくに高寺奎一郎君が1984年6月に所長として赴任してからは、協力し合いましたが、こちらが助けてもらう方が圧倒的の多かったです。

**イタリア市場での宣伝活動** スイス市場については本部からの指示で「外国旅行市

場要覧」（1986年版）のスイス編を作成し、その時のデータが資料として残っていますが、事務所所在国のみ掲載との指示だったため、イタリアについては調査データが残っておらず、詳細を記すことができないのが残念です。「国際観光振興会のあゆみ」を見直すと、イタリアでもいろいろの事業をやっています。ほとんどが単独ではなく、他機関と共催しています。主なものを挙げると、本部主催の「巡回観光セミナー」（1982、ミラノ）、ジェトロと共同の見本市参加（1983 パレルモ、1984年カリアリ）、日本文化祭（1983年、ミラノ）、ミラノ観光見本市（BIT:この年から毎年JAL、JTB、日本のホテル等と共同参加）、インコントラアジア（5か国）によるイタリア都市巡回セミナー（1983年9月、ミラノ、フィレンツェ、ボローニャ、パドヴァ、トリノ）、ジェノバでエージェント・セミナー（1984年、JALミラノと共催）、ASTA ローマ総会日本ブース設営（1985年5月）、ボローニャでエージェント・セミナー（JALミラノと共同開催）などがあります。

**関係機関との連絡協調の緊密さ** JNTO が単独で行う活動には限界があります。観光宣伝はなるべく多くの機関と協調共同で実施するに越したことはありません。その点ジュネーブでは宣伝活動のパートナーとなり得る組織が、物理的にも人間関係でも、抜群にコミュニケーションがとりやすかったのです。オフラインのJALジュネーブ営業所（池田勝彦所長）はJNTOと同じビルの1階の通路を隔てたお隣さんで日常的に往来し、JTB（石井拓支店長）も歩いて3分の至近距離にありました。JALもJTBも当然ながら日本の観光宣伝を行う際の最強のパートナーです。JALについてはジュネーブ所長の紹介を得てチューリヒ支店、ミラノ支店、

ローマ支店と事あるごとに協調して仕事ができまし、JTB のローマ支店には日本のインバウンド担当のスタッフもおられ、連絡を取りつつ仕事ことができました。ほかに国連日本政府代表部、日本総領事館、在ジュネーブ日本商工会、ジェトロ、日瑞協会などの組織と常時いろいろな形で情報交換や協力ことができました。旅行業界向けの活動では、JNTO 単独でやることほとんどなく、最低でも各地の JAL の支店・営業所と共同でやりました。パリに駐在していた日本の何社かのホテル代表も事あるごとに参加してくれました。日本機関以外でも、小国であるがゆえに同業の在スイス、在ジュネーブの外国政府観光局、スイスの観光連盟とのお付き合いも密でしたし、スコールクラブ、AONTES（在スイス政府観光局連盟）といった関連の組織の月例会には必ず顔をだし、情報交換だけでなく、共同の観光宣伝の場や機会もあり、大変有益でした。AONTES は年 1 回以上家族ぐるみの 1 泊のバカンスが企画され、シャトーデーの気球の観覧、ルガノ周遊などが記憶に残っています。

以下、スイスとイタリアでの広報活動でとくに印象に残っている場面を一つずつご紹介いたします。

**ジュネーブ祭に山車を参加** ジュネーブ夏祭りは観光的に著名なイベントで、レマン湖を彩る花火もあり、湖岸通りに各国が趣向を凝らした行列を出します。着任翌年の 1983 年に大島愛高領事と相談し、今年は派手な山車を出してみようと企画を練り、JNTO は竿灯を担当し、領事館と日本商工会が欄干付きの山車を作成して練り歩きました。JAL、JTB も全面的に協力してくれ、この行列で日本はエレガンス大賞を受賞し、新聞でも写真入りで大きく取り上げられました。ちなみに 3 年

後の 1986 年には、富山県がスイスとの友好イベントを実施するためにこの時期県立高岡商業高校のブラスバンドがスイス・ベルンを訪問すると聞き、ジュネーブ夏祭への参加を本部経由要請しました。すでに満杯のジュネーブの宿泊事情から、市中心部の公共施設の地下シェルターを提供してもらい、1983 年の山車を再利用して行進し、好評を博しました。



**映画「音で見る日本」の受賞** 1984 年 10 月、イタリアの温泉保養地モンティカティーニで開催された国際観光映画祭で JNTO 作成の「音で見る日本」Japan、Portrait in Sound が 22 か国から出品された 150 本の中から最優秀賞に選ばれ、その授賞式に出席しました。この受賞は大変嬉しく、授賞式では事前の了解を得て小学生の娘に着物を着せて一緒に登壇して拍手を浴び、その時の写真が JNTO 会報 84 号（1985 年 3 月）に載りました。欧米諸国

とは異質の文化をもつ日本への関心が高く、JNTOのつくる映画はあちこちで受賞していますが、この「音で見る日本」はとくに凄いテーマだと思いました。日本の風土の多様性、伝統文化から現代風俗までを様々な「音」の流れを軸に斬新な感覚で描写したもので、素晴らしい味わいの映画です。この映画はアメリカではあまり受けなかったようですが、スイス航空が販促用に16ミリのプリントを購入したことでわかる通り、ヨーロッパのうるさ型にも意表を突く映画でした。私はこの映画が気に入って、日瑞協会その他の会合で上映し、貸出用映画としてPRに努めました。



### 日本人海外旅行者対策

日本人海外旅行者対策事業は1979年にスタートしました。マナーの向上や楽しい旅の実現のための様々な方策がとられました。海外事務所では情報提供と旅行相談の実施を求められました。私が赴任した時点で、事業開始以来2年半ほど

経っていて、多くの日本人旅行者が事務所を訪れていました。日誌をみると想定外の面白い質問を含め、結構無料の旅行相談所として活用されていたことが分かります。ジュネーブ事務所は鉄道駅からレマン湖に向かう途中のホテルの多い地区にあり、日本人旅行者もよく通るベルン通りでJAL事務所と軒を並べていましたから、旅行相談実績はJNTOの事務所中でロンドン、パリ、ニューヨークに次ぐベスト4（年間約1300人）でした。JNTOを知らない日本人旅行者がウィンドーの飾りつけを見て、「ここは何？」と入ってくる人が結構ありました。せっかくだからJNTOのサービスをPRしたいと思い、国際観光振興会という正式名称だけでなく、日本政府観光局（または観光事務所）の名前を出したいと本部に申請したらノーの回答だったので、白紙に次のように墨書して張り出しました。

日本人海外旅行者の皆様へ：この事務所は特殊法人国際観光振興会ジュネーブ事務所です。当地の旅行事情につきお困りのことがございましたら、お気軽にお立ち寄りください。日本人スタッフは2階におりますので、呼んで頂くか、裏の階段をお上がりください。

この時期の日本人海外旅行者はまだ海外の事情に疎く、警戒心も比較的薄く、金を持っているとみられがちで、あちこちでスリやかっぱらいの被害に遭っていました。ジュネーブもスイスも治安は比較的よく、旅行者の被害は少ない方でしたが、それでもスリや置き引きの被害は結構あり、ジュネーブ警察から観光客への注意事項の日本語版の作成を頼まれて提供しました。スリや置き引き、事故などの場合、JNTOは相談窓口にはなっても対応はジュネーブ警察と日本領事館（モンブラン橋の対岸にあった）にお任

せすることになります。相談・案内の中で最も印象に残っているのは、列車内で盗難にあった日本人カメラマンのケースです。彼は真っ青な顔をして来所し、ミラノからの列車内で相席の品の良いイタリア人カップルからチョコレートを進められて食べたところ寝込んでしまい、パスポートも財布もカメラ等の機材も撮影したフィルムもリュックごと全部盗られたということでした。ジュネーブ警察と日本領事館に案内して対応して頂きましたが、この方のがっかりした様子が忘れられません。

ほかにジュネーブはモンブランやスイスアルプス観光の拠点でしたから、そちらの案内もありました。モンブランにケーブルカーで上がる際に途中駅で休憩せず一気に頂点まで上がって心臓発作を起こした人もいましたし、登山で亡くなった方もいました。ご遺体を日本に送るにしろ、郊外で火葬するにしろ、領事館の方々の苦労は大変でした。

### 「安全で楽しい旅のために」アテネ編の作成

JNTO は日本人海外旅行者対策の一環として「安全で楽しい旅のために」というシリーズの冊子を作成して配布していました。ジュネーブ編とローマ編は前任者が作成済みでしたが、1983年度にアテネ編を追加することになり、その情報資料収集のために1982年11月3日～18日アテネに出張しました。在アテネ日本大使館、JALアテネ支店、ギリシャ政府観光局本部、ギリシャの旅行業者などを歴訪して全面的な協力を頂き、結果をまとめて原稿を東京本部に送り、翌年アテネがヨーロッパ編に追加されました。私は学生時代にギリシャ悲劇研究会に所属して古典ギリシャに強い憧れを抱いていたので、一観光客としても古代ギリシャの遺跡をめぐる一方、あえて路線バスに乗

って迷子になったり、シンタグマ広場の怪しげなバー（被害が報告されていた）を含む様々な飲食店に入って体験と見聞を広げました。

### ジュネーブにおける駐在員生活

パリ事務所での経験とは、仕事上だけでなく私的な生活でも大きな差がありました。初回だったパリ駐在では、ともかく仕事をこなし、環境に適応し、新しい見聞や知見を胸いっぱい吸収することで精いっぱいだったのに対し、ジュネーブではかなり余裕をもって過ごすことができました。大きな違いのひとつがパリ在勤中に長男（1971年）と長女（1974年）が生まれ、妻には大変な苦勞をかけましたが、今回は小4、小2を終わった時点でジュネーブに呼び寄せましたから、子供たちの教育をどうするか、学校生活にうまく適応できるかどうかが問題でした。

以下、少しでも駐在生活について触れてみます。

**住居のこと** 出発前ジュネーブは住宅事情が厳しいと聞かされていました。到着後の仮住まいは日本政府代表部が日本からの国際会議参加者のためによく使うウィークリー・マンションに入り、現地雇員の助けを借りてアパルトマン探しをしました。ジュネーブの郊外、といっても駅前のオフィスまで車で10分ほどの市の南西部グラン・ランシーによい物件を見つけました。オーナーが戸建ての家を建てて転居するあとを借りることにしたので、改装の時間も必要なので入居は4月半ばということでしたが、それまで待つことにしました。5階建てマンションの3階で、各フロア2家族ずつの90㎡ほどのアパルトマンでした。3寝室に広いリビングと食堂があり、バスルーム2カ所のほか、別途客用のトイレもあり、快適な住居でした。パリではマンションの居住者とは

没交渉でしたが、ジュネーブでは子供がいることだし、ご近所付き合いをしたいと考え、JNTO オフィスの目の前にあった有名な生チョコの店で箱入り（日本円で2,000円程度）を購入し、同じフロアの向かい側の家族と直上と直下の計3家族を訪ねて自己紹介し、「日本では引越し蕎麦という習慣があります。隣人の方にご厚誼を願いたいという趣旨です」と説明して包装した生チョコを贈りました。理由もなく他人にもものをあげるとするのは不可解な行為とされていましたが、この説明で機嫌よく受け取ってくれ、こののち学校のこと、お医者さんのこと、買い物のことなど気さくに教えてもらえました。妻は家に招かれたりもしました。コンシエルジュ（管理人）とも親しくし、おかげでいろいろ気を配ってもらえました。滞在中飼っていたペットのモルモット（コション・ダンド）が何匹か死んだ際には、その都度敷地の庭に埋葬してくれたりしました。

**現地の公立小学校に入学** 家族は小学校の終業式を終えて3月下旬にジュネーブに到着しました。1カ月弱ウィークリー・マンションで暮らした後アパルトマンに入居し、エコール・アン・ソーヴィーという公立小学校に入学しました。学校は徒歩1分の至近距離にあり、校庭の樹木にはリスが遊んでいるような環境でした。ジュネーブの学年度は9月始まりなので（ドイツ語圏は4月始まりだった）、4年生と2年生に編入し、2カ月余で休暇に入り、9月には進級しました。

学校に通うようになって日本との違いに驚いたことが多々ありました。その一つが、宿題がないのはもちろん、自宅では勉強させないよう教科書やノートは学校に置いたままにするよう言われたことです（教室には鍵がかけられる）。自宅で

は伸び伸び暮らせようという趣旨でしたが、私の子供たちは入居を待つ間の1カ月弱語学学校のベルリッツに通っただけで、フランス語は学んでいません。予習復習をしなければ授業についていけないからと、特別許可をもらって教科書を持ち帰ることを認めてもらいました。フランス語がわからない外国人の子弟（かなりいた）のための補修授業もありましたが、これは体育などの授業時間に行われたし、雰囲気もイマイチだったので、家庭教師を頼み、正規の授業で頑張りました。幸い苦労はしたものの二人とも次第に慣れ、半年後にはフランス語をしゃべるようになりました。長男は1年半後に中学の学齢になり、スイスドイツ語を学ぶことになる公立中学でなく、ジュネーブにあるフランスの私立中学のフロリモン校に入学しました。1年半後には帰国後のことを考慮して、全寮制のロンドン立教育学院に入れました。妹もその1年後、兄と一緒にいいということでロンドンに行きました。

**ジュネーブの日本語補習校** 日本人駐在員子弟の教育は、帰国後日本の教育制度に再適応しやすいように、日本人子弟が多い都市や非英語圏で教育制度が遅れている国では、必要に応じて文科省によって全日制の日本語学校が設置されますが、そうでない都市では現地校に通うことを前提に、日本語補習校が設置されています。私立の全日制日本語学校のある都市もあります。ジュネーブの日本語補習校は民間の建物の2階に7室の専用の教室を借りて水、木、金、土の4日間授業を行っていました。生徒数は1986年時点で小学部107名、中学部25名、特設部44名の計176名で、3分の2はフランス語の公立校に、3分の1が英語で教育するインターナショナル・スクールに通っていました。

開校日が多いのは補習校が対象とするスイス・フランス語圏（国境付近のフランス領を含む）のうち、学校の休日がジュネーブ州は木曜日、ヴォー州とフリブール州が土曜日、フランスが水曜日と異なっていたからです。

補習校の運営は保護者8名と顧問、教師からなる運営委員会（原則土曜日に開催）で協議して決定していました。私も就任直後から委員のひとりとして運営に参画しました。子供を通じて親同士が懇意になるのは国内でも同じですが、ジュネーブでは年齢の違う子の家庭も含めて交流し、小さな社会なので子どもがいるいにかかわらず、日本人どうしで招き合ったり、外食したり、いっしょにスキーやテニスやバカンスに出かけたりしました。在住の日本人社会での様々なお付き合いは、多分ジュネーブでは特に密度が高かったと思います。ちなみに、当時の民間在住者をメンバーとする日本商工会の会員だけで100余名を数え、これに国連日本政府代表部とILO, UNCTAD, WHOなど20の国際機関で働く日本人国際公務員、およびその家族を含めると、800名ほどの方が在住しておられたのだと思います。

**余暇活動** ジュネーブ市は人口16万人程度の小都市ですが、コスモポリタンな文化都市でしたから、オペラやコンサートなども超一流の楽団が度々来演しましたし、日本からも文化使節のようなグループが頻りに訪れて、参観や交流の機会に恵まれました。古今亭志ん朝の落語を聞いたのも、囲碁の梶原九段に練習碁を打ってもらったのも日本人会の催しのおかげでした。

日本人社会での行事を思いつくままに挙げると運動会、テニス大会、ゴルフ大会、スキー大会、日瑞囲碁大会、カラオケ大会、豚汁つきスキーバスの運行、ジ

ュネーブ祭での遊覧船の運航、などなどがありました。

駐在者にとって旅行やバカンスは大いなる楽しみでした。ジュネーブは西ヨーロッパの地理的中心に位置しており、高速道路が四通八達していましたから、フランスはもちろんイタリア、ドイツ、オーストリアくらいまでは週末のドライブ旅行で行けました。夏のバカンスはイタリア、ドイツ、フランスへの長期のドライブ旅行、航空機利用の欧州内旅行、わが家の場合子供だけの地中海クラブの滞在型商品を購入して夏休みを過ごさせたり、南スペインやトスカナ海岸での家族バカンスを楽しみました。クリスマス・年末年始の休暇はもっぱらスキー場で過ごしました。

この時期の日本人社会が特別だったのかどうかはわかりませんが、1980年代をジュネーブで過ごした駐在員仲間のうち、帰国後マスコミ系各社を中心に有志が集って月1回の情報交換会が行われていましたし、1989年からはさらに年末年始の時期に家族ぐるみの「同窓会」を開催するようになり、この懇親会はコロナ禍が発生するまで続きました。

## ジュネーブで学んだこと・考えたこと

着任早々本屋巡りをして、マルク・ボワイエ著 *Le Tourisme* (1972年初版の再版) を見つけて精読しました。この本はヨーロッパの観光発展史にもかなりのページを割いていて、これまでの見聞・知見を超えて触発されました。満5年間スイス、フランス、イタリアという世界に冠たる観光地を満喫し、その発展の経緯を学んだことは私の将来の道を垣間見させてくれました。

今回はジュネーブで学んだことと帰任後配属された観光宣伝部（当時は事業第一部）での仕事についてお話しします。